

乳前歯・歯根破折に対する初期治療の経過について

○宮崎修一¹ 宮崎明日香¹ 伊東泰蔵²
 所属1みやざき歯科こども歯科(八代)
 所属2いとう歯科(熊本)

【目的】

小児外傷の中で、乳歯の場合は陥入、挺出あるいは歯軸方向以外への転位などが多く認められる。この場合通常は、保存療法として行われているが¹⁾、歯根破折の状態になると困惑するケースになり、保存か最悪では早期の抜歯なども検討される。

今回は、4歳児の上顎前歯の歯根破折に遭遇し、有髄歯のままで修復固定した約7か月間の臨床結果について報告する。

【方法】

患者：4歳7か月 男児

主訴：前の歯がグラグラしている

初診：2017年3月30日

現病歴：園内の遊戯中に転倒し、前歯部を打撲。同部からの歯肉出血と咬合不全を訴えて、受傷後すぐに受診。

現症：顔貌所見では、下口唇部に軽度な擦過傷を認めた以外異常はなかった。口腔内所見では、上顎左乳切歯が口蓋側に変位して、重度の動揺を認めた。また唇側歯肉縁部に裂傷をがあり、止血した状態であった。デンタルX線所見では、患歯は根尖部付近に破折が明瞭で、変位した状態であった。反対側では根尖部に亀裂が疑われたが、動揺は認められなかった。通常根尖部の歯根の吸収像を呈していた。

診断：不完全脱臼による歯根破折

治療：受傷後1時間後に修復を行った。歯髄保存した後、ハイブリットレジン(Kerr社コンストラ)で固定を行った。

【結果】

固定2週間後の口内とデンタルX線所見では、歯冠色には変色はなく、臨床症状はなかった。また固定後の破折線は一見消失した状態であったので、固定除去を行った。

受傷後2か月では、根尖部の破折部は固定直後の所見よりやや透過像が増したように呈していたが、症状には変化がなかった。

受傷後7か月では、歯冠色には変化がなく、自発痛もなく異常はない。根尖側破折片部の歯根吸収は生じていたが、反対側でも同様であった。

【考察】

小児での外傷範囲では、乳歯と幼若永久歯などの治療で年齢による差がみられる。原則的には治療の内容は違わないが、乳歯となると患児の協力度で変化していくことも事実である。

その中で歯根破折例では、その特徴は一般診療科とはかなり差異があると推測される。

乳歯こそ最大なる保隙装置であるということで、保存療法を評価することを目的として、後継永久歯との交換がスムーズに出来るよう今後の治療を目指したいと思う。

【文献】

1) 日本外傷歯学会：歯の外傷治療ガイドライン. 2012年